

NHK朝の連続テレビ小説における夫婦像の形成と変遷

ZHOU, Shuhan / 周, 姝含

(発行年 / Year)

2024-03-24

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2024-03-24

(学位名 / Degree Name)

修士(国際文化)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

修士論文

指導教員 佐藤千登勢 教授

論文題名

NHK 朝の連続テレビ小説における夫婦像の
形成と変遷

国際文化研究科 国際文化専攻修士課程

氏名 周姝含

論文要旨

国際文化研究科国際文化専攻

周姝含

本稿は、NHK 朝の連続テレビ小説（以下 朝ドラと略す）における夫婦像の形成と変遷を考察した研究である。本研究の目的は朝ドラを時系列に沿って分析し、時代によって変化したヒロイン夫婦像の形成と変遷を考察することにある。そのうえ、朝ドラにおける夫婦像がこのように変化を遂げてきた理由を論じていく。

朝ドラは長きにわたりヒロインの社会進出を描く「女性一代記」を提供し続け、ヒロインを中心に描いてきたが、2010 年以降の朝ドラは、ヒロイン夫婦を中心に描く作品が増えており、『ゲゲゲの女房』をはじめとして、大正・昭和の夫婦が多く登場するようになった。2010 年以降、大正・昭和の夫婦を描く作品が放送されるようになるとともに、朝ドラの視聴率は徐々に回復し、SNS 上でも視聴者が朝ドラのヒロイン夫婦を考察する投稿が増え、ネット上では「朝ドラで好きな夫婦」を選ぶ投票なども数多く行われている。筆者はこの現象に注目し、朝ドラにおけるヒロイン夫婦像の形成と変遷について興味と疑問を抱くようになった。

朝ドラに関する先行研究としては、朝ドラ初期の作品に対する考察、朝ドラの海外受容、朝ドラ放送がもたらす経済効果に関する研究や、黄馨儀（2010b）と渡邊・城間（2019）をはじめとする朝ドラにおける女性像および男性像に関する研究などがあるが、現時点に至るまで、朝ドラの夫婦像を考察する学術的な研究は管見の限りでは見当たらない。

上記の疑問を明らかにするために、本研究は小林由紀子と亀村朋子による朝ドラを第 1 期から第 5 期までに区分する時期区分を採用し、そのうえ 2020 年から第 6 期に突入したという筆者の考えを提示する。研究方法については、各時期における夫婦像を概観したうえで、一つの作品を選んで作品分析を行い、そのヒロイン夫婦像を考察した。具体的な研究対象は第 1 期作品『旅路』（1967 年）、第 2 期作品『濡つくし』（1985 年前期）、第 3 期作品『めぐり』（1997 年前期）、第 4 期作品『どんと晴れ』（2007 年前期）、第 5 期作品『まんぷく』（2018 年後期）、第 6 期作品『ちむどんどん』（2022 年前期）である。考察する際に、ウラジーミル・プロップの物語論にそって物語構造を分析し、ジェノグラムによってドラマにおける家庭モデルを説明した。また、役割構造、勢力構造、情緒構造という 3 つの側面から、夫婦像を考察した。

本稿は以下の 8 章で構成される。第 1 章では、朝ドラの放送時間、視聴率と視聴習慣、朝ドラの魅力、また朝ドラとネットの連動などの新動向を紹介したうえで、朝ドラに関する学術的な研究を概観し、時期区分と研究対象、また理論的枠組みと研究方法を説明する。第 2 章から第 7 章では、前述した時期区分と研究方法に沿って、第 1 期から第 6 期までの夫婦像の概観と作品分析を章ごとに行った。第 8 章では、第 2 章から第 7 章までの内容をふまえ、朝ドラにおける夫婦像の形成と変遷を明らかにし、その上、朝ドラが変化してきた理由について考察した。

以上の 8 章にわたる分析によって、本研究は以下のことを明らかにした。

朝ドラの物語構造、家庭モデル、夫婦像分析を通して、昭和から平成へ時代が移り変わる中で、朝ドラ作品が示す家庭モデルや夫婦役割構造の変遷が現実世界の夫婦の変化の動向にほぼ合致していることが窺えた。

そして、朝ドラの第5期は朝ドラのターニングポイントであることが明らかになった。第1期から第4期までの作品と比べ、第5期は第1期や第2期の「時代もの」に回帰し、その中に現代の世相に応じた要素が加わるようになった。朝ドラが第5期から大きく変化した理由については、現実の世相との関係と視聴者との関係という2つの観点から考察した。

現実の世相との関係については、第5期以降の朝ドラは大正・昭和の夫婦が多く描かれている理由を2000年代に日本社会において「昭和レトロブーム」が起こったことと関連していると考察する。第5期以降の朝ドラは必ずしも2010年代放送時の社会問題をそのまま提示するのではなく、古き良き大正・昭和を描くことで懐古的な雰囲気を醸し出し、その中に現代の世相に応じた要素を加えることで新機軸を打ち出すという、朝ドラの新動向が見受けられた。視聴者との関係については、NHKは第5期以降、古き良き大正・昭和を描き、昔の朝ドラと似た感覚の作品を放送することで、視聴者を惹きつけ、視聴率を回復させたことを指摘した。また、多メディア時代である現在、SNSが朝ドラの宣伝や視聴者の意見の獲得に重要な役割を果たしていることが窺えた。

最後に、朝ドラのほぼ変わらない特徴として、「良好な夫婦関係を保つ夫婦」、「助け合う夫婦」を描くことで、視聴者に「理想的な夫婦」の様態を提供し続けていることを指摘した。その理由については、視聴者に「理想的な夫婦像」を提供することで視聴者に情緒的な価値を提供し、視聴者を惹きつけて朝ドラの魅力と影響力を再拡大しようというNHKの意図を推測した。